

## 教師のバーンアウトの測定

小島秀夫（茨城大学）

### 1 問題

1970年代の中頃にFreudenbergerがバーンアウト（burnout）という用語を使用してから、バーンアウト研究は世界各国でなされている。バーンアウトの定義は一概ではないが、Maslachなどの定義が広く受け入れられているようである。Maslachはバーンアウトを「長期間にわたり人に援助する過程で、心的エネルギーがたえず過度に要求された結果、極度の心身の疲労と感情の枯渇を主とする症候群であり、卑下、仕事嫌悪、思いやりの喪失」と定義している（稲岡文昭、1988）。バーンアウトの定義は各研究者によって表現の違いはあるが、内容はほぼ一致していると考えてよいと思われる。

問題は、バーンアウトをどのように測定すればよいかということである。バーンアウトの測定についてもいろいろな研究者がさまざまな方法を提唱してきている。そうした中でも多くの人に使用されてきているのが、Pinesの尺度とMaslachの尺度である。これらの尺度については研究が蓄積されているといつてよい。

本研究の目的は、教師のバーンアウトの測定をどのように行えばよいかということを示すことである。

### 2 バーンアウトの測定

本研究ではバーンアウトを測定するために、以下のような質問項目が使用された。これらの質問項目は、最初バーンアウトを測定することを目的に作られたものではなかったが、研究の過程でバーンアウトを測定しているも

のとして扱ってよいことが明かとなった。質問は、以下のようなものである。「あなたは全体として現在の職業にどの程度満足していますか。」これは「非常に満足」から「非常に不満」の4段階で質問されている。「あなたは、教師になってよかったと思うことがありますか。それともありませんか。」この質問に対する回答は「よくある」から「まったくない」の4段階でなされた。「あなたは、以下のような気分になることがどの程度ありますか。それぞれについて答えて下さい。」と質問し、「よくある」「たまにある」「あまりない」「まったくない」の選択肢の中から1つを選択してもらった。用意された項目は以下の10項目である。①疲れやすい、②安眠できない、③憂うつな気分になる、④イライラする、⑤ばく然と不安になる、⑥生徒との接触がわずらわしい、⑦同僚と顔をあわせたくない、⑧生徒の親との接触がわずらわしい、⑨授業のとき気が重い、⑩勤務が苦痛だ。残りの質問項目は、「あなたは、現在の職業にどの程度やりがいを感じていますか。」であり、この質問に対しては「非常にやりがいを感じている」から「まったくやりがいを感じていない」の4段階の中から1つを選択してもらった。

### 3 データ

分析に使用されるデータは茨城大学情報教育研究室が1996年1月に実施した「教師の社会意識と教育意識に関する調査」によって得られたものである。この調査は教師の職業的社会化過程を解明するために実施されたもの

であるが、調査項目の中にバーンアウトを測定する項目を含めた。調査対象者は、茨城県内の小・中学校教師（管理職者を含む）2000名であり、系統抽出法によって抽出された。調査方法は郵送調査法であり、有効回収率は63.8%であった。以下の分析では、管理職者を除いた一般教師のみを対象とする。

#### 4 因子分析による検討

尺度の妥当性を調べるために因子分析がしばしば使用されるが、ここでも因子分析を使用した。因子分析の結果、以下の3因子が抽出された。（ ）内は因子負荷量。

##### ① 脱人格化（固有値4.37, $\alpha$ 係数.769）

- ・生徒との接触がわずらわしい（.751）。
- ・同僚と顔をあわせたくない（.628）。
- ・生徒の親との接触がわずらわしい（.681）。
- ・授業のとき気が重い（.706）。
- ・勤務が苦痛だ（.498）。

##### ② 精神的消耗感（固有値1.48, $\alpha$ 係数.741）

- ・疲れやすい（.731）。
- ・安眠できない（.675）。
- ・憂うつな気分になる（.685）。
- ・イライラする（.635）。
- ・ばく然と不安になる（.440）。

##### ③ 達成感（固有値1.09, $\alpha$ 係数.761）

- ・職業満足（.753）。
- ・教師になってよかったと思う（.819）。
- ・やりがい（.809）。

この因子分析の結果では3因子が抽出されたが、これらの因子はMaslachが抽出した因子と同じものである。Maslachは、Maslach Burnout Inventoryを作成する際に、因子分析を使うことで、バーンアウトは情緒的疲弊（emotional exhaustion）、離人化（depersonalization）、自己成就減（self-accomplishment）の3因子が存在していることを明らかにしている。したがって、われわれの調査で

は質問項目は異なるが、Maslachと同じものを測定しているのいうことができる。 $\alpha$ 係数はCronbachの $\alpha$ であり、尺度の信頼性係数である。

#### 5 分析結果

ここで分析結果のいくつかを示しておくこととする。Maslachらの研究グループはどのような理由かは不明であるけれどバーンアウト尺度を脱人格化（DP）、精神的消耗感（EE）、達成感（AC）の3つの下位カテゴリーに分けて使用しており、そのように使用することを勧めている。しかしながら、ここでは下位カテゴリーのみではなく、尺度値を合計した値も使用することとする。なぜならば、たとえば達成感のみを扱ったのではバーンアウトを分析したことにはならず、それはあくまでも「やりがい」とか「生きがい」を分析したことにはならないからである。相関係数は以下ようになった。

表1 尺度間の相関係数

| 合計 | EE   | DP   | AC   |
|----|------|------|------|
| 合計 | .851 | .878 | .646 |
| EE |      | .589 | .346 |
| DP |      |      | .448 |

ここで、EEとDPの相関係数がEEとACの相関係数よりも大きくなっているのは、これまでの研究結果と一致している。

分散分析も実施したが、EEは男性よりも女性において高いことなどが明らかにされた。（分析結果は、当日配布します。）

#### 6 文献

稲岡文昭、1988、「米国におけるBurnoutに関する概要、研究の動向、今後の課題」『看護研究』21、pp.20-26。